

奴児干永寧寺碑蒙古女真文積二稿

『長田夏樹論述集（下）』第11章

（原載：『石濱先生古稀記念東洋学論叢』，1958年11月）

この論文は、明代「永寧寺碑」拓本中の碑陰にある蒙古文と女真文を積したもので、①はしがき、②蒙文積、③女真文積、④書写法・音韻・格助詞、⑤資料文献、からなる。

旧版（1958）の論文名は「釋稿」、新版（2001）は「積二稿」とあるとおり、②と③には大幅な改定と増補がみられる。

④は文字・音韻について言及する。そのうち二つのみ紹介する。一つは、“永樂”の樂を蒙古文で *lau*（3例）と表記し、女真文では *lo*（3例）とするのは、それぞれが扱った漢字音の差異を示すものという。いま一つは、女真文において“大明”を *dai-mi*（1例）とし、“永樂”を *yi-lo*（1例）とし、鼻音韻尾の *iq*, *uq* を脱落させる場合のあることを指摘する。それは *mī*, *yiü* のように鼻母音に近かったための過誤であるという。前者は明代の漢語の層に係る問題であり、後者は永寧寺碑の明代女真語の所属方言に係る問題であるかもしれず興味深い。

次いで長田氏は永寧寺碑女真文に見られる7つの格助詞の用法に言及する。その内3つのみ紹介する。与格（*dativus*）につき、金代の得勝陀碑・進士題名碑・慶源碑には男性母音の *do* と女性母音の *dö* の両形があるが、永寧寺碑では先行母音の如何にかかわらず *do*（字形は金代の *dö* の文字）一つであるとする。もっとも③積文（12行目）をみると二箇所にも *do* が使用されている。おそらく長田氏は、一部に *do* に相当する文字が用いられていることを認識しつつ、永寧寺碑の女真語では既に区別は消失していたと判断したのであろう。金光平・金啓琮『女真語言文字研究』（文物出版社，1980）も長田氏と同様である。この点につき、Kiyose, Gisaburo N., *A Study of the Jurchen Language and Script—Reconstruction and Decipherment*. (Hōritsubunka-sha, 1977) は文語要素もしくは文体上の理由によるものかとする。愛新覺羅烏拉熙春『明代の女真人『女真訳語』から『永寧寺記碑』へ』（京都大学学術出版会，2009）は格助詞の使い分けは弛緩状態にあるとする。

次に、対格（*accusativus*）につき、母音調和に支配された *ba* と *be* があるが、意味の明らかな場合は省略されるという。愛新覺羅 2009 にも同様の指摘がある。興味深いのは処格（*locativus*）の扱いである。長田氏は、*teyi-ken-le-xi*（近くにあるもの）の *le* 及び *goro-on-lo-xi*（遠くにあるもの）の *lo* を格助詞とするが、愛新覺羅 2009 は方位詞語尾とする。

最後に、長田 1958 につき、Daniel Kane, *The Sino-Jurchen Vocabulary of the Bureau of Interpreters*. (Indiana University, 1989, p.65) に、長田氏は永寧寺碑の蒙文と女真文のほぼ完全な研究を公表した最初の研究者となったとあることを紹介しておきたい。（吉池孝一）